

年頭のご挨拶

国立研究開発法人産業技術総合研究所理事
地質調査総合センター長
矢野 雄策

皆様、新年あけましておめでとうございます。
令和3年の年頭にあたり、産総研地質調査総合センターを代表して謹んでご挨拶申し上げます。

新型コロナウイルス危機下での産総研と地質調査総合センター

昨年は、世界にとって大きな危機である新型コロナウイルスの感染拡大が社会全体を揺さぶり続けた年となりました。世界はこのパンデミックを抑えることができるかどうか、開発されたワクチンがいつ行き渡り、それが効果を発揮するのかどうか、感染拡大開始からほぼ1年を経過した現在でも依然として不安な状況が続いています。

我が国では昨年春の第1波の中で社会の危機感が急速に高まり、様々な感染対策がとられ、我々の生活様式・仕事の様式は大きな変化を迫られました。外出自粛要請、海外渡航禁止が行われ、3密の回避、マスク手洗い、ソーシャルディスタンス、テレワーク、オンライン会議などが新しい常識となりました。しかし第2波、そして第3波と進むにつれ感染者数の波が大きくなっています。

世界の感染拡大はさらに深刻な様相を呈しています。この感染拡大のため、先進諸国では医療機関の逼迫の危機がありますが、もともと医療機会の乏しい国々では貧困や飢餓の一層の拡がりなどの大きな危機に直面しています。2015年に国連ではSDGs＝持続可能な開発目標を設定し、2030年までの実現を掲げてきましたが、このパンデミックによって、その取り組みが大きく後退せざるを得ない状況です。

このような中で、地質調査総合センターの所属する産総研は、国の研究機関として研究開発によってこの感染拡大に立ち向かう以下のような取組をはじめしています（産業技術総合研究所、2020）。

- 地下鉄車両の窓開けなどの換気効果に関する研究
- 大規模集客イベント等における感染抑止に関する研究*
- AI向けクラウド型計算システム「ABCI」を新型コロナウイルス感染症対応に無償提供

- 新型コロナウイルス RNA を対象とした測定能力の国際比較
- 新型コロナウイルス治療薬候補となる既承認薬の発見
- 迅速診断用 PCR 機器の開発と社会実装
- 新型コロナウイルスの信頼性の高い迅速診断システムの開発
- 人工知能研究開発ネットワーク (AI Japan)：新型コロナウイルス感染症対策関連に係る AI を活用した取組

* この研究開発には地質調査総合センターの研究者も参画しています。

地質調査総合センターは、新型コロナウイルスの感染拡大の中、この1年間は感染予防対策をとりながら、またテレワークやオンライン会議など、新しい仕事の様式を活用しながら、野外調査、実験などを含め、我々の責務である研究を継続してきております。上記のような新型コロナウイルスに関連する研究は、まさに社会の喫緊の課題に対する対応ですが、地質調査総合センターで主に行っている知的基盤の整備、資源や環境に関する研究、あるいは地震や火山などの自然災害に関する研究も社会の大きなニーズ、課題に対応するためのものであり、ひとときも手をゆるめるわけにはまいりません。

社会の危機とはこのようにすさまじいものかということをも再認識した意味で、今回のパンデミックは改めて我々の意識を変えたと思いますが、10年前の2011年の東日本大震災も自然災害の恐ろしさと社会への大きな影響を強く印象づけた社会危機でした。このような社会危機へ対応すべく行う研究について、国の研究機関としての産総研、その一員としての地質調査総合センターは、その責務として強い自覚を持って進めてまいります。

新型コロナウイルス危機中のコミュニケーション

新型コロナウイルスは飛沫感染と接触感染で感染が拡大するといわれています。このため、基本的には人と人が近寄らないことが重要であり、職場でも接触率を下げる出勤体制、テレワーク、オンライン会議が用いられています。テレワークについては、研究所ではテレワークではできない実験や、職場にある試・資料を活用した仕事などがあり、実際に出勤したほうが効率的と考える研究者も多く、全面的にはテレワークに変更することができていないのが現状です。ただ、研究室では一部屋に多くの研究者と補助員が配置されている部屋はほとんどなく、多くは一部屋に2,3名ですので、全面的なテレワーク体制でなくても、接触率を一定以下に抑えた状況で研究を行う体制がとれています。

一方、会議に関しては昨年の第1波において多くが急速に実会議からオンライン会議に切り替わりました。職場での少人数での打ち合わせなどを除けば、多くの会議でオンライン会議が活用されています。新型コロナウイルス以前においても例えば情報技術分野などではオンライン会議の活用が進んでいたと思いますが、地質の分野においては私も含めて昨年の第1波で初めてオンライン会議とのつきあいが始まったという者が多いように思います。もう10か月程度の経験となりましたが慣れた点もあり、またいまだに戸惑う点もありという状況です。オンライン

会議といっても、比較的大人数の場合には、小人数の実会議とオンラインを併用する場合があります。

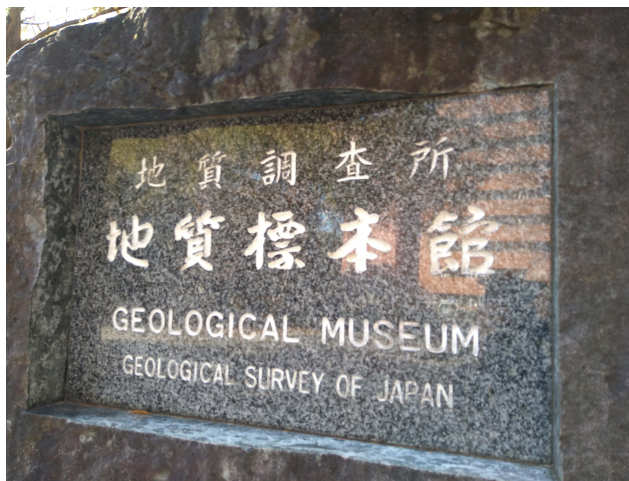
職場内部の会議だけでなく、外部の委員会や会議、学会の集会、講演会、展示会などもオンライン化しました。GSJシンポジウムもこれまでは毎年、2回ほど東京など外部の会場で開催してきましたが、令和2年は開催することができませんでしたので、令和3年オンライン開催を予定しているところです。日本地質学会と共催して行ってきた地質情報展も令和2年は中止せざるを得ませんでした。学会なども講演会をオンラインに切り替えたところが多かったようです。

オンラインに変更できない集会もあります。地質調査所と地質調査総合センターのOB会である水無月会は毎年6月に開催されていましたが令和2年は中止となりました。これは業務ではなく懇親の会ですが、地質の調査に係わる経験を語り継ぐ人的ネットワークの場でもありましたので、なくなってしまうのは残念で、新型コロナウイルス危機が終わり、開催される日が来ることを念じています。

このように、人と人との実接近が少なくなり、オンライン化が進む中で、コミュニケーションレベルをいかに保つかが重要な課題となっているような気がします。例えば、地質調査総合センターでは毎年新人研究者を採用しています。例年であれば、私も新人の方たちと顔を合わせ、話



地質標本館正面



地質標本館玄関前の銘板（筑波山の斑れい岩）



すことによって顔を覚え、人を知り、そのことを総合センターのマネジメントに生かすことができていると思います。新人研修から始まり、新人研究発表会、あるいは様々な懇親の場、職場のバーベキュー会やセミナーなどでふれあうことが可能でした。しかし、令和2年の新人の方々はなかなかそういう機会が少なく、新人発表会も秋になってようやく実講演とオンラインを併用して開催され、マスク姿で講演する新人の方たちと数メートル離れてやりとりすることができました。

私共の研究を社会に役立てる意味で、外部の方々とのコミュニケーションは一層重要ですが、これも去年は必要なコミュニケーションレベルを確保することが精いっぱいだったような気がします。会社などに訪問する、会社の展示会に参加する、あるいは学会などの場を活用して多くの方々にお会いするなどの活動が制限され、これまでの人的ネットワークを使ってなんとかオンライン会議などで情報交換しておりましたが、この状況下でも人的ネットワークをいかに拡充してゆくかはたいへん重要な課題だと考えています。

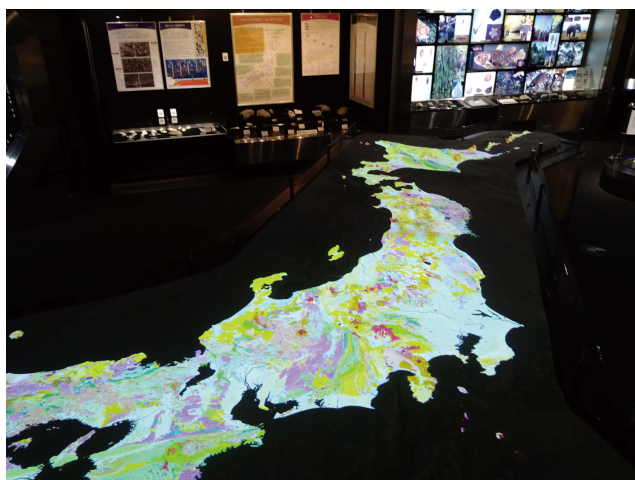
新型コロナウイルスの状況が今後どのようになってゆくか見通せておりませんが、上述したように、この危機は我々の生活・仕事様式を変えました。新しい様式への変化

の中でこれまで精いっぱいであったことも、この新しい様式を積極的に活用することによって、今後の活路を見出していくことができるかもしれません。地質調査総合センターと社会とのつながりも、そのような前向きな姿勢で拡充に取り組んでいきたいと思っています。

写真は昨年12月に撮った開館40周年を迎えた地質標本館です。去年は感染拡大防止のため2月末から一時休館となり皆様のご期待に沿えない時期があり、また6月頭からの再開後も人数を限った予約制とせざるを得なくなりましたが、今年は多くの皆様の明るい笑顔をお迎えできるようになればと念じております。これから始まる令和3年、地質調査総合センターは社会の皆様とのつながりを助け、いっそうの調査・研究に努めてまいりますので、皆様も感染に気を付けてお過ごしいただき、よりいっそうのご支援・ご鞭撻をいただければ幸いです。

文献

産業技術総合研究所（2020）社会の中で、社会のために～新型コロナウイルス感染症に関連した産総研の取組。 https://www.aist.go.jp/aist_j/covid-19/index.html（閲覧日：2021年1月7日）



地質標本館第1展示室の投影マッピング



地質標本館第4展示室